

序言

上野和男

本書は一九八六年度から一九八八年度にかけて実施した国立歴史民俗博物館の共同研究「家族・親族と先祖祭祀」の第一冊目の研究成果報告書である。

国立歴史民俗博物館は歴史学・考古学・民俗学の三学協業によって新しい歴史学の創造をめざす研究機関であるが、研究事業の中心は全国の研究機関に所属する研究者とともに実施する各種の共同研究である。国立歴史民俗博物館の共同研究の中心は、一九八一年の創設以来継続している「都市における生活空間の史的研究」「日本における基層信仰の研究」と題する二つの基幹的な共同研究であり、本共同研究はこのうち「日本における基層信仰の研究」の第二期の共同研究のひとつとして実施されたものである。「基層信仰」の第二期の共同研究の共通課題は「祖先祭祀」であり、「葬墓制と他界観」（研究代表者・山折哲雄）と「家族・親族と先祖祭祀」（研究代表者・上野和男）の二つの共同研究で構成されている。「葬墓制と他界観」は葬墓制をとおして日本人の他界観を明らかにすることを課題とする共同研究であり、一方、「家族・親族と先祖祭祀」は家族・親族など社会組織との関連で日本の祖先祭祀を

明らかにしようとする共同研究であって、この二つの共同研究をつうじて日本人の祖先祭祀の観念と構造に接近しようとしたのが、第二期の「基層信仰」の全体計画であった。

これまでの多くの研究者によって、行われてきた日本の祖先祭祀研究によって祖先祭祀と社会構造とは有意な関連をもつ点においては基本的な了解が成立しているが、具体的な関連のありかたについてはさまざまな見解が提示されてきた。本共同研究は祖先祭祀と社会構造との関連のなかで、とくに家族・親族組織と祖先祭祀との関連に焦点をあてて日本の祖先祭祀を明らかにすることが目的であるが、より具体的にいえば本共同研究の課題は以下の三点に要約できる。第一は日本の祖先祭祀の地域的な変差をまず明らかにすることである。とくに日本各地では「位牌分け」「分牌祭祀」「複壇家制」「男女別年齢階梯制墓制」「祖名継承法」などさまざまな形態の祖先祭祀がおこなわれており、これらが家族・親族とどのようにかわっているかを明らかにする必要がある。第二は日本の祖先祭祀の長期的・短期的変化を明らかにすることである。長期的歴史的にみれば祖先祭祀がいつ成立したのか、またそれが中世や近世の

家もしくは家族とどう関わっているのか、さらに短期的にみれば、明治以降、とくに戦後の祖先祭祀がどう変化したのかが問題となる。この点において、祖先祭祀の研究は日本における「家」の成立と変容というきわめて大きな問題を明らかにすることにもなる。第三は祖先祭祀の諸形態が日本人の死者観、他界観とどうかかわっているかを明らかにすることである。これらのいくつかの問題をとおして日本人の基層信仰のひとつとしての祖先祭祀を、社会構造と祖先観の両面から総合的に明らかにするのが本共同研究の課題である。

以上の目的にしたがって本共同研究は、家族・親族などの社会組織との関連の視点から、これまで日本の祖先祭祀の研究にあたってきた各分野の研究者に幅ひろく参加を要請することとし、その結果、下記のメンバーを共同研究員として委嘱することにした(所属研究機関は一九九二年三月現在)。

共同研究「家族・親族と先祖祭祀」共同研究員および招待報告者
 研究代表者 上野 和男(国立歴史民俗博物館民俗研究部助教・社会人類学)
 研究分担者 伊東 睦子(日本民俗学)

大藤 修(国文学研究資料館助教・近世史)
 孝本 貢(明治大学商学部教授・社会学)
 杉山 晋作(国立歴史民俗博物館考古研究部助教・考古学)
 田中真砂子(お茶の水女子大学文教育学部教授・社会人)

類学)

都出比呂志(大阪大学文学部教授・考古学)
 坪井 洋文(前国立歴史民俗博物館民俗研究部教授・日本民俗学)(一九八八年六月死去)
 尾藤 正英(川村学園女子大学教授・近世史)
 松村 敏(金沢大学教育学部助教・近代史)
 峰岸 純夫(東京都立大学人文学部教授・中世史)
 村武 精一(青山学院女子短期大学教授・社会人類学)
 森岡 清美(成城大学文学部教授・社会学)
 義江 明子(古代史)
 吉田 孝(青山学院大学文学部教授・古代史)
 植野 弘子(茨城大学教養部助教・社会人類学)
 滋賀 秀三(東京大学名誉教授・中国法制史)
 清水 昭俊(国立民族学博物館第一研究部助教・社会人類学)

末成 道男(東京大学東洋文化研究所教授・社会人類学)
 森 謙二(シオン短期大学教授・法社会学)
 共同研究員は全体で一五名で、その内訳は歴史学六名、考古学二名、日本民俗学二名、社会学二名、社会人類学三名である。またこのほかに研究会の招待報告者として五名の研究者を委嘱した。これらのさまざまな分野の研究者が共同して日本の祖先祭祀と家族・親族の研究にあたるのははじめての試みである。なお、共同研究員のうち前国立歴史民俗博物館

館民俗研究部長・坪井洋文氏は本共同研究なかばの一九八八年六月、急性心不全のため逝去された。つつしんでご冥福を祈りたい。

一九八六年度から一九八八年度まで、本共同研究の研究会は一三回にわたって開催され、あわせて二八件の研究報告がおこなわれた。このうち四回は「葬墓制と他界観」班との合同研究会であった。共同研究会の詳細は第二冊目の報告書にその詳細な内容を掲載する予定である。また本共同研究では共同調査として、次の四地点でフィールドワークを実施し、家族・親族と祖先祭祀の現状についての資料収集にあたった。

- 1 群馬県伊勢崎市周辺農村における「位牌分け」の調査
- 2 新潟県糸魚川市農村における「総墓」の調査
- 3 三重県菅島における盆行事・両墓制を中心とする祖先祭祀の調査
- 4 奄美大島宇検村における墓制の変化の調査

本報告は三年間にわたる本共同研究の研究会における報告と討議、および共同調査の成果を集約したものである。本書は三部から構成されている。第一部「総論」は本共同研究にいたる日本の祖先祭祀研究の現状と問題を論じ、本共同研究の課題を学史的に明らかにしたものである。第二部「先祖祭祀の史的展開と変容」は、日本の祖先祭祀の歴史的变化と近代におけるその変容を、歴史学や社会学の視点から論じたものである。さらに第三部「祖先祭祀の諸形態」は共同調査の成果を中心に、日本各地の祖先祭祀の諸形態を「盆行事」「両墓制」「総墓」「位牌分け」などに焦点をあてて論じるとともに、日本の祖先祭祀を東アジアと比較して理解するために、中国の祖先祭祀に関する論文を加えたものである。

本共同研究は毎回の研究会できわめて活発な報告と討論が繰り返され、歴史学、考古学、民俗学の三学協業を趣旨とする国立歴史民俗博物館の共同研究として成功裡に終了しえたのは、参加していただいた共同研究員ならびに招待報告者の熱意の賜物であり、ここに心からの御礼を申しあげたい。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)